

平成29年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

- I スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び
- II マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成
- III スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築
- IV 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成
- V スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

道府県・政令市名【 宮城県 】

1 実践テーマ	【 II・III 】
2 実施対象者	宮城県利府高等学校 スポーツ科学科2年次（2クラス） 73名
3 展開の形式	<p>(1) 学校における活動</p> <p>① 教科名（スポーツ総合演習）</p> <p>② 行事名（ ）</p> <p>③ その他（ ）</p> <p>(2) 地域における活動</p> <p>① イベント名（ ）</p> <p>② その他（ ）</p>
4 目標 (ねらい)	特別講師の講演およびボッチャの実技体験を通して、特別な支援を必要とする人などに対する支援の在り方を学び、すべての人々が社会やスポーツに参画できる社会づくりへの振興発展にかかわることができる資質や能力を育む。
5 取組内容	<p>(2017.9.28 木)</p> <p>一般社団法人 日本ボッチャ協会 強化指導部長 村上光輝 氏による講演（演題「スポーツと共生社会」）およびボッチャ実技体験</p> <p>本校スポーツ科学科では、競技力向上に関する知識・技能について学習するだけではなく、これからの社会でスポーツの振興・発展に寄与していくために、障がい者スポーツに関する学習・体験も実施している。今までゴールボールやフロアバレー、ブラインドサッカーなどの体験も実施しているが、本年度は本事業を利用して、ボッチャに関する講演および実技体験を実施した。</p> <p>ボッチャは、脳性麻痺などの運動能力に障がいがある競技者向けに考案されたスポーツであり、リオパラリンピックで日本は銀メダルを獲得している。講演では「スポーツと共生社会」と題して、銀メダルを獲得するまでの経緯などを踏まえながら、東京パラリンピックで必要とされる人材やサポート体制などについて説明され（写真1）、その内容に生徒達は熱心に聴き入っていた。（写真2）</p> <p>また講演後には、生徒たち全員で実際にボッチャの体験を行った。ルールを確認した後、実際にボールに触れてみて、ボールを投げる際の力加減や、的を狙うことの難しさを体感した。また、それと同時にボッチャという競技がとても頭を使うスポーツで、周囲の状況を見極める洞察力や、戦術を組み立てる柔軟な発想力、お互いのコミュニケーション等が必要不可欠であることを知り、生徒たちはボッチャという競技により一層興味を持ったようである。</p>

(写真1)



講演する 村上光輝 氏

(写真2)



生徒たちが熱心に
講演に聴き入る様子

<ボッチャ体験>

(写真3)



(写真4)



(写真5)



(写真6)

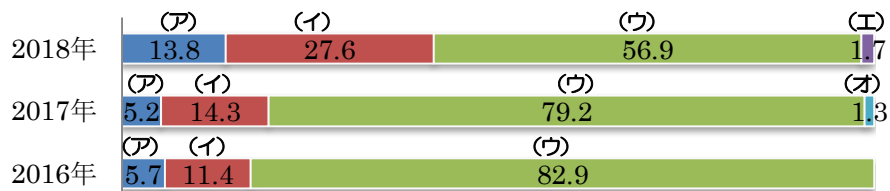


6 主な成果

村上氏の講演ならびにボッチャ実技体験終了後にアンケートを行い、生徒たちに下記の質問をしたところ、結果は次のとおりであった。

- Q：パラスポーツを体験して、どんな感想をもちましたか？
- (ア) 今回のこの経験を生かして、将来は何らかの形でパラスポーツに携わってみたい (13.8%)
 - (イ) 今回のこの経験を生かして、今後もパラスポーツの勉強を続けてみたい (27.6%)
 - (ウ) パラスポーツに興味をもつことができた (56.9%)
 - (エ) パラスポーツを体験したが、今後この内容を深めるつもりはない (1.7%)
 - (オ) その他 (0%)

パラスポーツ体験 アンケートの結果



	<p>本校では今までもゴールボールやフロアバレー、ブラインドサッカーの学習をしており、一年間の学習のまとめとして同様のアンケートを行ってきた。今回、アンケートを行った時期が例年と異なるため、一概に比べることはできないが、(ア)と(イ)という回答の数値がこの3年間でもっとも高いものとなった。これは、講演の中で村上氏がおっしゃっていた「ボッチャという競技を行うためにはパラリンピアンを支える人が必要で、あなたたちもその一人になれるかもしれない」という言葉が生徒の心に響いていると考えられる。</p> <p>また生徒たちは、あまり大きな身体活動は伴わないものの、お互いにコミュニケーションを図りながら競技を進めていくということに関して、自分たちと大いに重なる部分があることや、一球を投じることによって形勢が変わるため、先々の展開まで予測しながら作戦を考えていかなければならないという繊細かつ大変難しい競技であるということを知り、大きな衝撃を受けたことも窺える。</p> <p>いずれにしても、スポーツが健常者だけのものではなく、性差や年齢、障害の有無に関係なく、誰にとっても平等であるという「スポーツ・フォア・オール」の理念に基づいた授業が行われたことは、今後地域の指導者となって活躍が期待される本校スポーツ科学科の生徒たちにとって、有意義な授業であったと思われる。</p>
7実践において工夫した点(事業の特色)	<p>2020年の東京オリンピック・パラリンピックが近づいていることもあり、「見る・する・支える」という3つの視点の中でも、「する」「支える」という点に焦点を当てて今回の講演ならびにボッチャ体験を実施した。「する」という視点は、体験をしてただ楽しめばよいということではなく、ボッチャの体験を通して、競技に関わっているパラリンピアンの想いを感じることで、その結果、競技者を「支える」という視点につながっていくことを意識した。講師の村上氏がその点を踏まえて準備をしてくださったこともあり、生徒たちの中には「自分たちがなんらかの形で2020年に携われるかもしれない」という意識が芽生えたように思われる。日々、部活動に励んでいる生徒たちにとって、パラスポーツに触れることは日頃の部活動への取り組みを振り返る機会となるだけでなく、共にスポーツを楽しむ多くのパラスポーツ愛好者の方々に対する理解を広げる良い機会となっている。</p>
8主な課題等	<p>生徒は興味をもってボッチャ体験をしていたが、同時に体験させるには2クラスでは対象人数が多かったかもしれない。しかし、内容的にはスポーツ科学科に限らず、さらに多くの生徒に体験してもらいたいものであった。講師を招いての実施となると、予算的な制約のため難しい面もあるが、ボッチャを体験する上で適正な人数で、かつ複数回にわたって実施できれば、さらに効果的であったと思われる。</p> <p>また、ボッチャは運動能力に障がいがあり、車イスを利用している競技者も多い。運動障がいの体験として、車イスに座りながら手の動きに制限を加えた状態での体験も考えたが、参加人数の多さもあり、今回は実施しなかった。</p>
9来年度以降の実施予定	<p>本校スポーツ科学科では、社会でスポーツの振興・発展に寄与していく人材の育成を目的に、どのような障がい者スポーツを取り扱うかなどを常に検討している。その際、講義や講話だけではなく、実際に体験できるかという点も重視している。</p> <p>その点において、ボッチャは障がい者と健常者が共に協力し合いながら競技することができるという点で優れている。来年度以降も学習すべき障がい者スポーツの競技・種目の1つとして検討している。</p>

